少年たちの終わらない夜

年たちの終わらない夜

少年たちの終わらない夜

鷺沢萌
Megumu Sagisawa

初版発行／1989年9月29日
28版発行／1993年11月12日

発行者／清水　勝
発行所／河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2
電話　03(3404)1201
振替　東京 0-10802

印刷　大日本印刷株式会社
製本　和田製本工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします。
定価はカバー・帯に表示してあります。
©1989 by Megumu Sagisawa. Printed in Japan. ISBN4-309-00587-x

少年たちの終わらない夜

CONTENTS

少年たちの終わらない夜……5

誰かアイダを探して……75

ユーロビートじゃ踊れない……95

ティーンエイジ・サマー……175

ブック・デザイン　泉沢光雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

少年たちの終わらない夜

SPECIAL THANKS
TO
NAONORI. K
HIROYUKI. N
and
MANY COCKY BOYS
IN THIS TOWN

少年たちの終わらない夜

空の青さが目にしみる。流れ落ちる汗がまぶたの上に溜まる。もうすぐ夏が来ようとしている。

陽に灼けた首筋に光る汗は、何かのしるしのようにも見える。あと四キロ、あと三キロ――。残りが少なくなっていくにつれて、自分の中に高まってくるものがあるのを感じる。その感じは何かに似ていると真規（まさき）は思う。

蹴りあげた足の爪先から、心音のような鼓動が伝わってくる。それが自分自身の身体（からだ）の音なのか、それともただの錯覚なのか、真規には判らない。判らないけれど走り続ける。両方の脚は跳

躍するような敏捷さで、まるで誰かにあやつられているようにコンクリートの舗装道を刻む。今は止められない。

最後の一キロにさしかかったところで真規はスピードをあげる。目の前が白くなってくるようで、頭の中だけが冷たい。ここまで来ると、もう走っていることが走っていることではなくなる。

正門の前で膝に手をついて呼吸を整えていると、坂本の声がした。

「川野オ」

汗を腕で拭って真規が振りむくと、坂本亮がバスケ部のマネージャーの滝井を連れて来ていた。

「コーチが呼んでる。スタメン決めるってさ」

走ったあとの気持ち良さに邪魔が入ったように感じて、真規は顔の筋肉を歪めた。

「何ムッてんだよ、早く行けよ」

真規は黙ったまま腰を伸ばして、ゆっくりと体育館の方へ向かって歩き出した。坂本と滝井のふたりが、真規の両脇に並ぶ。身長一八七センチの真規と並ぶと、ふたりの肩が真規の胸のあたりに来る。

「川野さん」

滝井が見あげるように真規の方に顔を向けた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「何」
「や、あとでちょっと……」
真規は無言で頷いた。
三年の引退試合が一週間後に迫っている。真規はセンターで四番を背負っている。絶対に勝たなければならなかった。試合が終わって夏になれば、真規は十八になる。

真規が陽子にはじめて会ったのは、去年の秋だった。パーティーの二次会で渋谷に流れて、そこで見かけない女がいると思ったのが陽子だった。白いワンピースがライトを映して青白く見えた。
「あの子知ってる？」
「ああ、利加が連れて来たんでしょ」
「へえ……」
「呼んでくる？」
「いいよ、好みじゃないよ」
「そオ？　遠慮しないでよ」

ミホがそう言って笑った。ミホの頼りなげな細い身体とやわらかすぎる金茶の髪を、真規は気に入っていた。一度だけ寝たことがある。だからと言ってミホに遠慮しなければならない筋合はない。「遠慮しないでよ」というミホの言い方が気に喰わなかったので、真規はミホに向き直って言った。

「じゃあ呼んでこいよ」

ミホはにやっとして、陽子を呼びにフロアの方へ行った。ミホの後姿を眺めながら、真規はちょっと惜しいことをしたと思った。ハーフのミホは脚が長い。背の高い真規がいつも思うことは、普通の身長の女の子と並んで歩くと首が疲れるということだった。ミホなら真規と二十センチくらいしか違わない。

——まあ、いいや。

ミホが陽子の腕をつかむようにして戻って来た。

「川野くん。川野……えーと何だっけ、真規くん」

「どうも」

ミホに脇をつつかれて真規がペコッと頭を下げると、陽子は不思議なものを見るように真規を見つめた。

ミホの好きな曲が流れ、ミホは歓声をあげてフロアの方へ飛び出して行った。残された格好になった真規と陽子は、突っ立ったままでフロアを眺めていた。
「何て名前？」
「陽子。笠井陽子」
「カサイさんね」
真規はそう言いながら陽子を見た。――長い髪はまアまア、髪にかくれて顔は見えないけれど、ちょっと覗いているあごの感じもまアまア。
心の中で真規が陽子の採点をしていると、視線に気付いたのか陽子がフッと真規を見あげた。真規は少なからずドキリとした。陽子の目は顔に対して大きすぎた。そうして妙に赤い唇は小さすぎた。顔の中でひどくアンバランスに配置された目と口は、けれど不思議に危ない均衡を保っている。美人なのか美人でないのか判らなかった。
陽子のどこに惹かれたのかと言われれば、真規はそのときの印象を答えるしかない。真規が陽子と付きあいはじめたと聞いて、仲間は笑った。
――あのブス？　川野どうしちゃったの。
――でもあの子よく見ると可愛いんだぜ。

――いや、俺はアッチの方がかなり良いんだと見た。
――それが違うンだってよ。川野まだあの子食ってないって。
――ウソ!?
――マジだって。

真規が三年に進級したとき、誰もが信じられないと言った。仲間うちでも留年決定と見られていたのが、あっさり上がれた。成績は悪い方ではなかったが欠席が多かったのだ。
「セコいんだもん、お前」
留年した坂本が言った。真規は学期の始めから、自分の欠席日数を数えていて、学期の終わりでギリギリの出席日数を保てるように調整したのだ。セコいと言われようと、そんなことは当たり前だと真規は思っている。
「いいじゃん、新人戦二回も出れて」
同じバスケ部の坂本に、真規は冗談めかしてそんなふうに言った。
「ふざけンなよオ、俺いっこ下と一緒に遊ぶのヤだよオ」
「なんで、いいじゃない、スーちゃんもいるし」

真規のことばに、坂本は今度は本気で怒った。「スーちゃん」と真規が言ったのは、ミホと同じ〝インター〟の一学年下にいるやはりハーフの女で、本名は関口スーザンと言う。この女が坂本に惚れているのは仲間うちでは有名な話だが、坂本はスーザンから逃げようとして必死なのだ。

「だってアイツ、ハーフのくせに可愛くないんだもん」

確かにスーザンは背が普通よりも低めでおまけに顔が大きい。仲間の何人かは、それでもいいじゃない、と坂本をけしかける。

「可愛いか可愛くないかなんてこの際カンケイないじゃん。食っちゃえよ」

そう言われると坂本はニヤッと笑って首を振る。

「やだよ、アソコ血だらけになっちまうよ」

スーザンは歯の矯正をしていた。

練習が終わった帰り際、マネージャーの滝井が真規を呼び止めた。

「川野さん、ちょっといいすか」

真規は滝井の方を振り返った。一年下の滝井を、真規はあまり好きではない。二年を「仕切って」いて、留年(ダブ)った坂本に妙になれなれしくしている。

「なんだよ」
「ヤマシタ知ってますよね」
「ヤマシタ？　どこの」
「麻布のヤマシタ……」
「ああ、いっこ下だろ」
「そうなんですけど、アイツがちょっと……」
滝井がねちねちと語り出した話によると、そのヤマシタが、今度滝井たちが打つパーティーと同じ日に、しかも同じビルの階が違う場所で、同じ時間帯でのパーティーのチケットを流していると言う。
「女が流れちゃってンですよね」
「女ったって、麻布が呼ぶ女じゃ別にカンケイない女だろ」
「それがあ、K女の恵美子とか……」
「ええ？――どうして」
「や、どうもパー券タダで流してるらしいんですよ」
「――バカじゃねえの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com